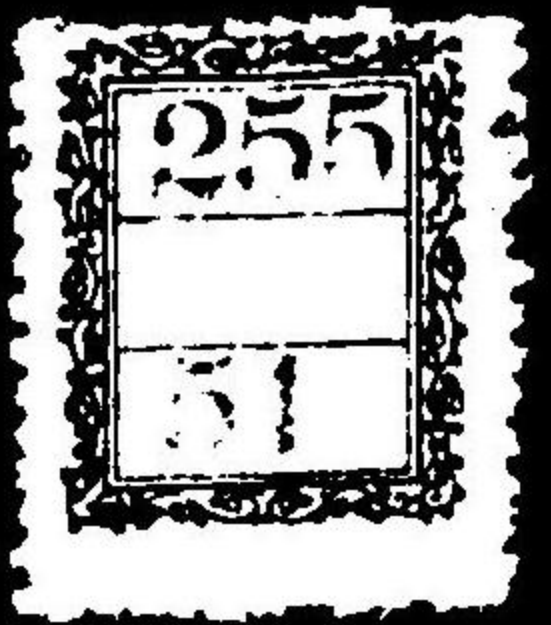
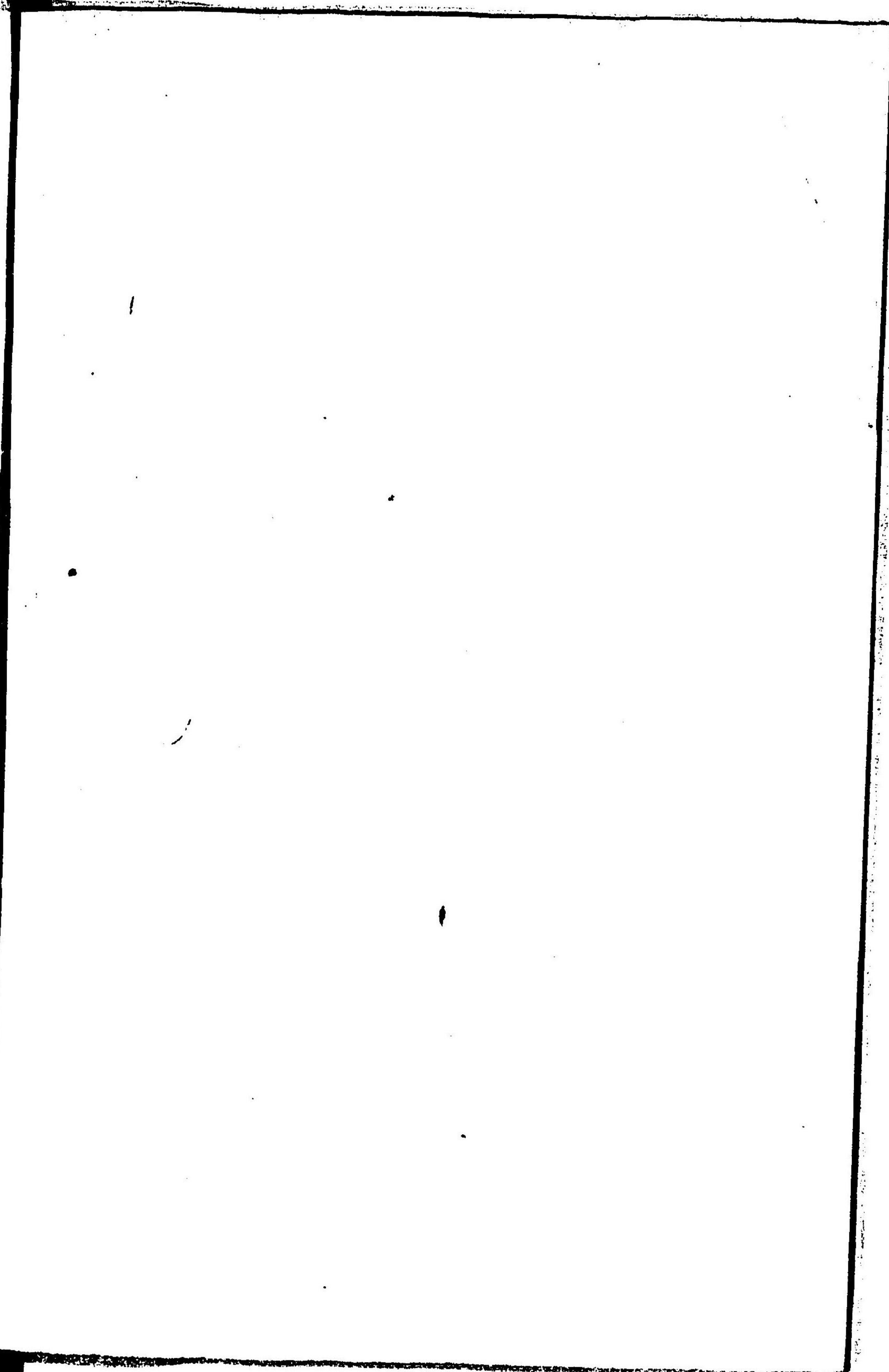
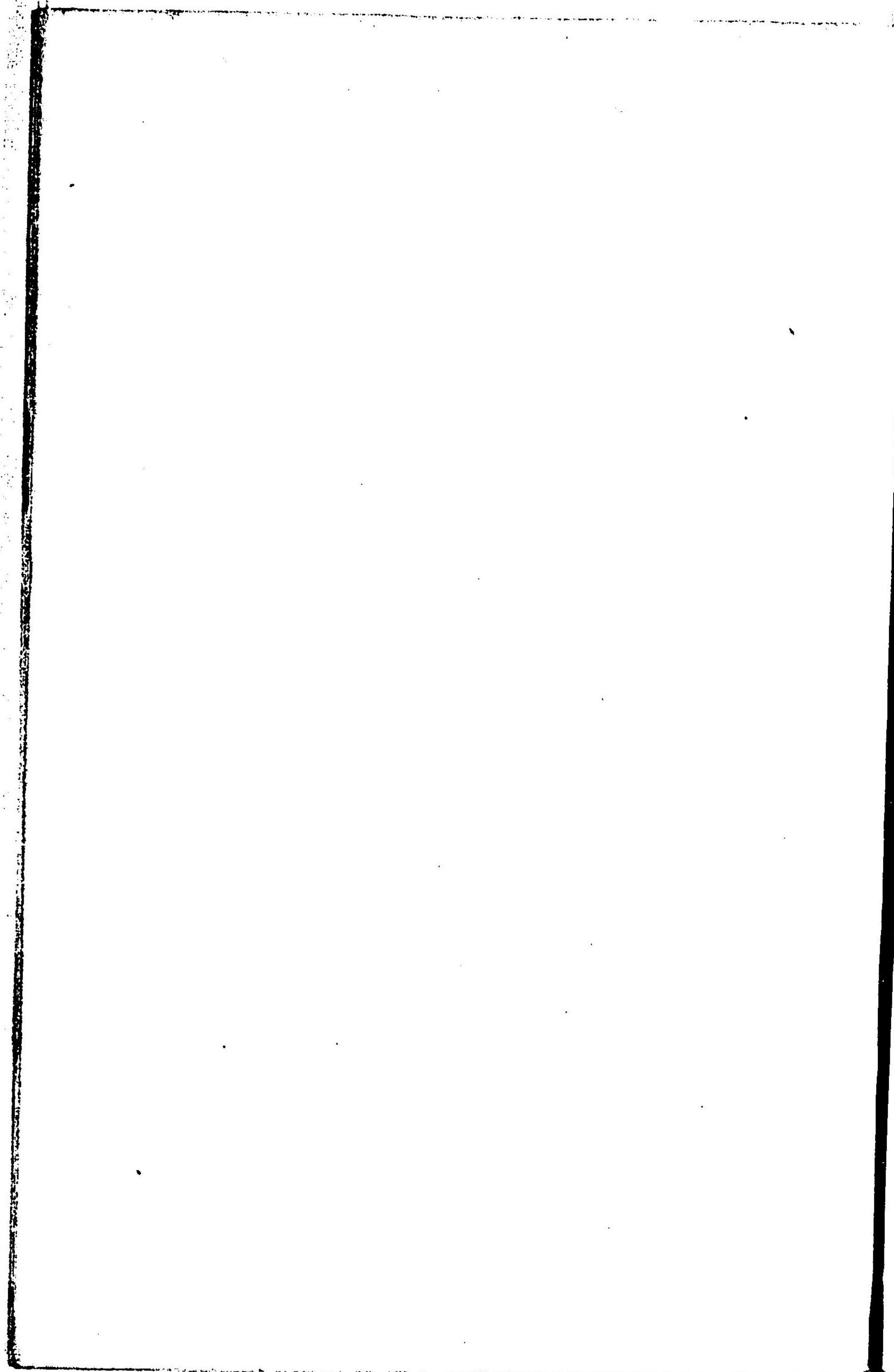


特42
4
444

西王母
道明寺
經改
急
巴
二







西
江
舟

有
之
皇
五
帝
昔
者

明治
39-12-18
内空

洪
清
文
化
の
源
を
追
ひ
尋
ね
し
て

心
を
こめ
て
其
の
意
を
考
へ
し
て

日
本
の
文
化
を
追
ひ
尋
ね
し
て

其
の
意
を
考
へ
し
て

西
江
舟

天よかたせなむら
辰の興さむねく方天
よおの目もてらる相
密や千産のさるび
りそとさゆる方
鳥よむらむらむら金

銀珠の老ふきりく
くして日夜の陳から
アタリカマの森見城
そ樂々もあ
桃栗らのさむら
ら市城の貴賤すり

業カヒ已ヨク書カの地浦カ路カカカすカ
面白カヤカクカカカカカカカカカカカカカカカカカ
加カ陵カ頰カ依カ花カ口カらカいカんカカカカカカカ
まカよカ也カ油カれカ羽カ目カ下カ業カ園カのカ交カ
らカあカまカのカ後カまカのカあカまカのカあカまカのカ

ちカりカろカくカたカまカなカおカのカまカのカあカまカ
又カらカいカんカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ
かカりカてカもカらカいカんカカカカカカカカカカカカカカカカカ
まカまカにカあカらカいカんカカカカカカカカカカカカカカカカカ
地カをカもカらカいカんカカカカカカカカカカカカカカカカカ
のカ冠カもカらカいカんカカカカカカカカカカカカカカカカカ

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

心へいりておかしき一書

しるしをいふに非ざる

はかばかしくいふは

作人^{ミヅノ}の相

損國田代^{トナリ}の

しるし^{ヒナリ}をいふに非ざる

たゞしき名をいふに非ざる

はかばかしくいふは

しるしをいふに非ざる

はかばかしくいふは

しるしをいふに非ざる

しるしをいふに非ざる

五部に於ては、
幾つに於ては國土に於ては、
亦在り可し。其の初
めは、
勸導中
の事なり。又、
現當二世の爲め、
五部に於ては、

五部に於ては、
軸より、
公、
一、
し、

意の神結縁今もて承る
たもて作せ今もて
めぬ我の深淵一神は持
借悪人我一其行を地
救世觀音を一切の
くもて作せ今もて承る

山名法華
改改
三學利益同
不さる
少く種
うあま
今在西方
觀觀世音
外神
是水の隅
如る寺
神の

ての茶を露もたせり
君のまき香を惜まじ
かみゆかみゆか
の清涼めをせしめ
あまのほほえみ
ぬめ娘のまほしき

るいでぬ時
観音寺の鐘を
を折る朝のま
まは川原の落
るいでぬ時
観音寺の鐘を
を折る朝のま
まは川原の落

花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて
よき花をば博覧のまはるゝとて

申すに
申すに
申すに
申すに
申すに
申すに
申すに
申すに
申すに
申すに

殊ハコの首ハコの末ハコの種ハコの心ハコの事ハコ
ハコの事ハコの事ハコの事ハコ
ハコの事ハコの事ハコ

經政

口書

是に仁和寺持主の申傳
 都江妻とて母も平家の「了
 但馬守經政の「たか」
 よりの者傳寵愛の「たか」
 忠の「たか」申傳

經政

天の御子に成るを望むは
 人の心ならずも成るは
 人の心ならずも成るは
 人の心ならずも成るは
 人の心ならずも成るは

人の心ならずも成るは
 人の心ならずも成るは
 人の心ならずも成るは
 人の心ならずも成るは
 人の心ならずも成るは

夢トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

花トクのささるる

なりしもの記ありしもの書きたり
 力成乾しき書きたり
 ちしものありしもの書きたり
 系 終るしき書きたり
 中よまの中よまの書きたり
 との備は若しき見徳ありし守

みもの同下なる青の書きたり
 終るしき書きたり
 蒙り書きたり
 今もひの心ありしもの書きたり
 ちの書きたり
 物言の書きたり

一 経改ニくハまの若年の音ニ
 一 よりおのゝ仁義ニ孔智信ニの五ニ
 一 常とあつニつニけよ又ニ花鳥ニ
 一 月詩ト管ト法トをト傳トるト書ト秋ト
 一 松陰トのト書トけト露ト水トのトあトるト書トとト
 一 心トもト花ト流トもトあトるト

得

一 昔トてト為トるト心トにトもトこトのトあトるト書トとト

一 女ト甲トのトあトるト昔トのト書トのトあトるト

一 女トのトあトるト業トのトあトるト周トのトあトるト系ト行ト

一 心トのトあトるト心トのトあトるト心トのトあトるト心トのトあトるト

一 心トのトあトるト心トのトあトるト心トのトあトるト心トのトあトるト

一 心トのトあトるト心トのトあトるト心トのトあトるト心トのトあトるト

歴史

此を畫へるに其の圖を以て畫の
 本を拂ひ給ふに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は

此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は
 此の如しに其の價は

さめがらむらみ
 白雲のほたる
 丹二の法師
 松の心
 三第四代
 の鶴
 ふな
 雲
 も
 龍
 の
 手

りれや
 村
 鳳凰
 鳳凰も
 比
 舞
 舞
 舞

あまのこころを
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして

あまのこころを
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして

あまのこころを
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして

あまのこころを
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして
かみかみして

「トまゝのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの
まトまトのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの
まトまトのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの
まトまトのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの

嚴

「トまトまトのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの
まトまトのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの
まトまトのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの
まトまトのト鬼ト靈トのトまトまトのト鬼ト靈トの

西國方より出る僧より我
都より都より都より都
都より都より都より都

夕上、心は海を船出して
重なる路をさるる
も、松原の里に
傾く、
心は海を船出して

心は海を船出して
不滅の業をなす
心は海を船出して
親念を改むるが
心は海を船出して

^{ニテ}
 花の心は花の魂の心
 花の魂は花の心の魂
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心

花の心は花の魂の心
 花の魂は花の心の魂
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心
 花の心と花の魂は花の魂
 花の魂と花の心は花の心

かきし^ノ田^ノ身^ノを^ノ控^ノと
そ^ノを^ノり^ノま^ノの^ノゆ^ノれ^ノ
ふ^ノけ^ノれ^ノを^ノひ^ノく^ノ筆^ノを^ノ
名^ノを^ノあ^ノを^ノあ^ノを^ノあ^ノ
猶^ノ又^ノ平^ノ家^ノの^ノ筆^ノの^ノ指^ノを^ノ
侍^ノ中^ノの^ノ次^ノ鳥^ノの^ノ書^ノの^ノ可^ノ裁^ノを^ノ

ち^ノあ^ノつ^ノて^ノ山^ノ陽^ノ道^ノ南^ノ海^ノを^ノ念^ノを^ノ
了^ノ十^ノ回^ノ之^ノ國^ノの^ノ所^ノを^ノも^ノの^ノ教^ノ令^ノ十^ノ
万^ノ余^ノ騎^ノを^ノ率^ノて^ノ善^ノを^ノ龍^ノ
を^ノの^ノ東^ノの^ノ田^ノを^ノ禁^ノを^ノ
善^ノを^ノの^ノ善^ノを^ノの^ノ善^ノを^ノの^ノ善^ノを^ノ
は^ノの^ノ善^ノを^ノの^ノ善^ノを^ノの^ノ善^ノを^ノ

月夜に舟をこぎしるる
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて

舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて
舟の影は水にうつりて
白雲の影は空にうつりて

あゝ歌の終るまで

昔の某日暮る由重あり

古身他生を縁ありて一樹の陰

の影を真寄梅の枝に

今も昔もあはれぬ枝のゆかり

ひまはあはれぬとち家もあはれ

あゝ歌の終るまで

昔の某日暮る由重あり

古身他生を縁ありて一樹の陰

の影を真寄梅の枝に

今も昔もあはれぬ枝のゆかり

ひまはあはれぬとち家もあはれ

女めはわんか 要の者 子

煙の翳るあわゆるして指浮

又たふゆの田にうらぶるて氷

とくろく 圃毎にうらぶるる道

ゆがゆがゆがゆがゆがゆがゆが

あはれおのりてあはれおのりて

可の田にうらぶるる時をかく
書の毎々をうらぶるる
女指のあはれおのりて
密境のあはれおのりて
あはれおのりてあはれおのりて

源はもみぢきりて
 心はもみぢきりて
 名はもみぢきりて
 一はもみぢきりて
 二はもみぢきりて
 三はもみぢきりて
 四はもみぢきりて
 五はもみぢきりて
 六はもみぢきりて
 七はもみぢきりて
 八はもみぢきりて
 九はもみぢきりて
 十はもみぢきりて

解
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

地
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

廣
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

此の書は、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

已

第 一 号
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

愛の光の海に沈む

猿威頼也

二子山

段静

八雲

鳥白首

ヤス

獨り

海

鳥

日

香

花

光

宗門僧徒之由は不可同く

神と人との別は明かす

旅人との別は明かす

伴に神とありては明かす

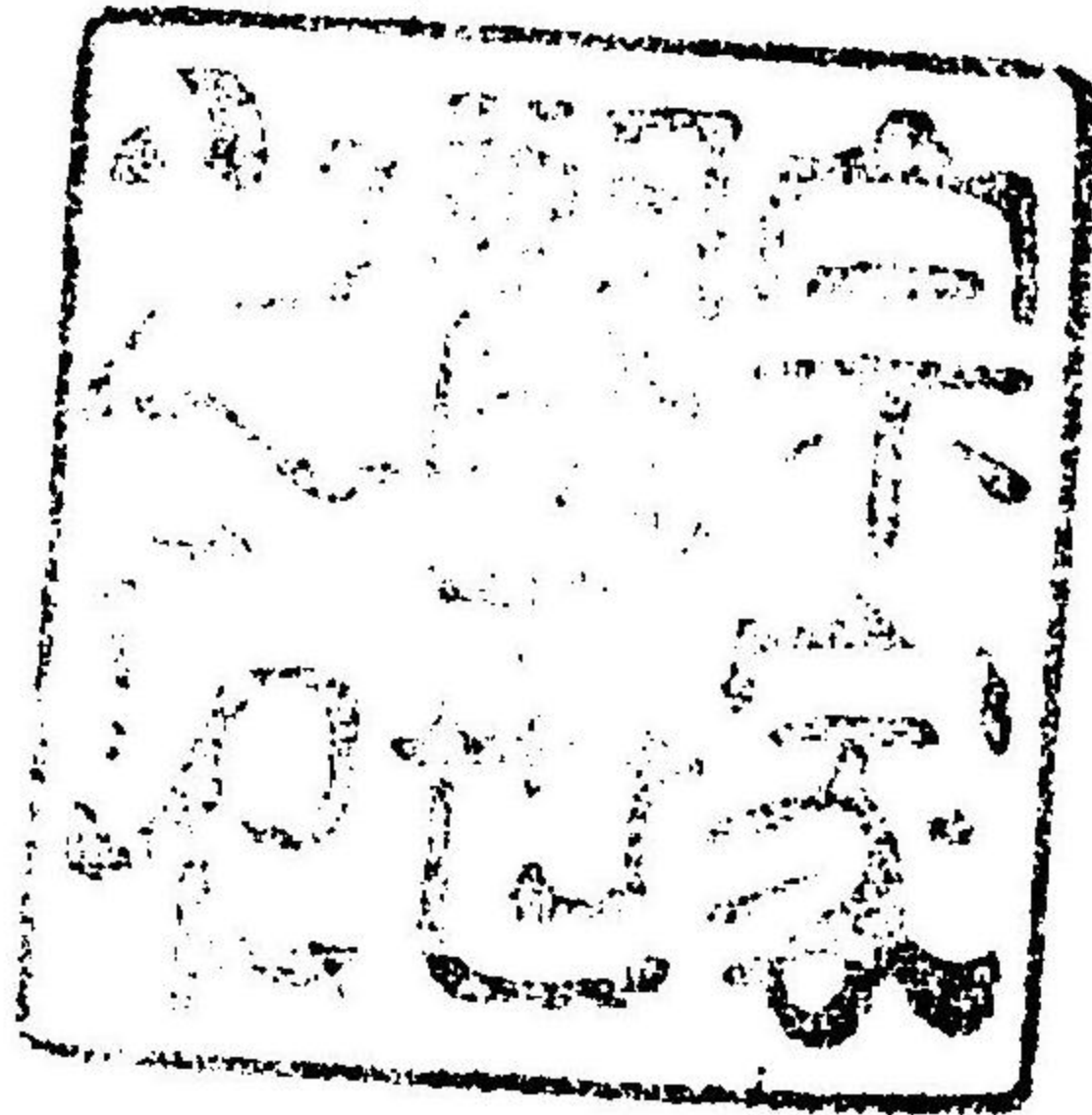
すに神とありては明かす

向て手なして明かす

一 宗門僧徒の由は不可同く
二 神と人との別は明かす
三 旅人との別は明かす
四 伴に神とありては明かす
五 すに神とありては明かす
六 向て手なして明かす
七 宗門僧徒の由は不可同く
八 神と人との別は明かす
九 旅人との別は明かす
一〇 伴に神とありては明かす
一一 すに神とありては明かす
一二 向て手なして明かす

明治卅九年十二月十五日印刷
同 卅九年十二月廿日發行

版權所有



東京市牛込區新小川町三丁目十番地

訂正者 觀世清廉

(電話番町三言十番)

京都市二条通越屋町角十二番戶

發行兼 榎常之助



(特電話三言九番)
(振替貯金三言五九)

